㊂ 冊七番目の分限
又一番の貧者

よう知つて京の袖鏡
兄弟三人忍び役者
それぞれの道は道
異見も聞く時ありけり
女郎買の身哀れなるかな

一 金の土用干、伽羅の口乞

和朝に遊女の色作つて金銀に賣る身と定めての以來、此美興に銀使ひ頭の大臣、今の都に有り。其の所は上長者町に住み馴れ、御所に近ければ宜しき事ばかりを見及び、姿は武士めきて心は公家に移しぬ。是れ渡世を思ふ人の成るべき事にはあらず。祖父より三代商賣ば仕舞屋にして、二十人餘の男女、心に任せて年中を暮らしぬ。此の親父死去の時門跡樣へ百貫目進げての外は、釜下の灰までも讓狀一つに濟みて、誰れか七つの内藏に指の差手も無かりき。此銀何程と云ふ其の算知つた者無し。腰元仕ひの若葉と云へる女、親御樣の時見及びしを語りけるは、毎年六月中は小判の土用干を遊ばしけるに、新左衞門の澁紙一枚に百兩づつ針金括にして、未だ人の手に渡らざるを、空所も無ら並べ置き、鳥籠にて埃を拂ひ、箱に納めて封を付け、一日に是程づつ、幾限りも無く風に當てられて、此家久しき小判ども夜夜唸くこと大方ならず。たまたま諸人の欲しがる物に出世して、遂に揚屋の手にも渡らず、まして野郎宿の花にも成らず、一生男を持たずに朽ち果つる娘の如く、是れは口惜しやと聲を立つる事、我等寢耳に入りて斯くと旦那殿に申し上ぐれば、其れは大贈なる小判めやと、箱を釘付け遊ばして、其後は土用干にも出でず、何時が大節季の拂ひやら、大名貸に成る事も知らず、年久しく埋れしが、若代の物と成り、此金子時に會うて、島原太夫職そもそもの野秋に掛かり、名殘惜しさは朱雀の細道と歌うたる戀草の朝露踏みて、直ぐに芝居に行きて、玉村吉彌

に壺入、夕暮よりは又丹波口に押し掛け、少時も我が宿を見ず、夢覺めて夢に又現の如く、五歳餘りの大騷ぎ、年年恰きし小判箱、明け暮れの附屆に何時とも無う殘り少なく、今三千兩に成る時やうやう我と合點して、さても使へば金銀程捗の行く物は無し、十五年以來に貳萬八千兩、銀に直して千六百八十貫目なり。此銀外の事には如何な如何な壹匁も使はず、是れ皆色道に捨てける。さるに因つて日本類無しの惡所銀使ひ頭と、名譽の名を取りける。是れを思ふに、一日に千貫目にても遣ひ果たして、知れぬ所は京の色町ぞかし。遠國にては銀は有りても遣ふべきやう無し。長者町の見事大臣、殘る三千兩思ひ切りて止まり所、是れ程の時も止めかね、其後太夫の黨に戀を仕替へ、家屋敷、傳はりの諸道具までも賣り拂ひ、何の子細も無く、著の儘に成りても猶止まりかね、男は自然の時の魂なるに、唯だ一腰の國光まで賣り通ひ、扇一本にて止まりける。女郎狂ひの形見とて殘る物には、文反古、一座の酒振、投節の間の手、仕懸の嘘を見出だすばかり、此外何も無く、身餓一つも暮らしかね、さまざま分別をするに、さながら京にて茶筅賣もならず、人臭の見えぬ時、夜船に乘りて大坂に下り、世に有る時拵へ置きし長堀の下屋敷を預けし炭屋善太郎と云へる者賴みにして下れば、是れも館野の新山に懸かり、身躰崩れて分散と成り、門口に負せ方より嚴しく番を付け置く折節なれば、爰に音信もせず、此の首尾悲しく、其れより天滿天神の鳥居筋に花屋の本兵衛住みぬ、是れが女房は御夢想の館燒して面面活計、今日を暮せしが、此女は京にて茶の間に使ひし其誼に、爰にやうやう歎きを云ひて賴みを掛け、同じ横町に造花の店を出し、春咲く藤、山吹を秋造り、時節違ひの紙子を六月に著るも可笑しく、輕い世帶を柳に行つて、櫻を或る時酒中花に仕懸け、是れにて小錢を取る樣なるも、元一つなる口より思ひ附きぬ。其比當社に萬灯の有りし時、北濱の淀屋橋の法師、あまた末社を連れて通り掛けに見付けられ、さても有りしに變る身の上、奢りより斯く成り果つる習ひなれば、さらりと昔の氣を變へて、折節は私宅へも御出と有れば、是れ忝し、御家來同前に賴み奉ると、以前は下目に見し人に、樣の字を百も付けて、其後は此法師、大鞍仲間に入りて、お次に詰めて、提莫盆掃除するなど、少し口惜しかりしに、小坊主が云へるは、飛石の上なる猫の糞を掻けとは、最早堪忍なり難く、食はずに死んだが增しと、暇乞無しに座を起たんとする時、夕御膳とて、先づ銘銘杉燒、小鳥蠱しの田樂、初鮭に諸味を掛けて出る。斯かる調菜今の身にして食ふ事は思ひ寄らずと、又時の氣に成つて、町人ながら大名ぞと、豐かな暮し淡ましき時、彼の法師の仰せられしは、今宵の騷ぎは、あの者を大名の御隱居に仕立てて、九軒の帥〔粹〕ども手取らして一興と有りしに、此男申すは、色所にて大名に成る事萬づに付けてむつかし、此の成貫に御祕藏の伽羅を壹匁御意に懸けられましたらばと申す慾なり。此家に本初面とて百双の名の木なり、壹匁餘り取らせば巾著に納め、衣裝付して罷り出でたるは、百目大名と笑ひける。揚屋町をさざめきて、住吉屋の甚太が廣座敷に居流れ、法師、宿の鼻に囁き、あれはさる御方樣御忍びの御遊山、常の客とは各別なり、物事閑雅に、何れとも定めず太夫四五人抓めと、出羽、高橋、小太夫交りに、酒も大方なる時まで、百目大名も古今の物師なれば、隨分大柄を捌きかねず、頭から高橋に肩を拈らせ、出羽が膝枕して、昔の心に成る

時、また法師勝手に立ち、彼方の御家に名譽の伽羅有り、是れを所望すべし、序ながら少し聞きたいと有れば、内儀遠慮無く、其通り申し上ぐれば、よく知つた事の、何より易い事、法師燒いて聞かされよと、件の巾著投げ出だす時に、小太夫が香爐に火加減して、彼の壹匁の伽羅割りもせず其儘燒けば、座中靜めて聞き競べしは、又否の成らぬ華奢事なり。百目の大名鹿を喰ひ締め、暫らく四邊を見廻し、大方火の通りかかる時、法師樣是りや成らぬと、彼の伽羅攫んで巾著に入れ、女郎の手前も恥ぢる事無く、大名罷めると置頭巾を取れば、一座笑ひ仕舞に床に入りける。此男昔は一燒に百目も惜まぬ大臣の、斯く怯る事は其時代と、誹を止めて不便がりて、お床の上がるまで淋しくば是れを讀ましやれと、太夫の名寄せ叩きの本を禿が貸しける。是れにも惡氣廻して、若し又最前の伽羅少し下さりませいと言ひ懸かられては、返事がむつかしいと、置所を變へて、褌襠の結目に包み込み、前後を紙縷にて括り置き、幾度も探りて見しは、飯炊女の懸男に貰ひし細銀を二十色もの心當にするに似たり。人は其時に移りて、斯く淺ましく成り果坊主。

二　佛の爲めの常燈、遊女の爲めの髮の油

遠國にも色騷ぎの有りとは云へど、氏神の祭を思うて、變りたる事は成り難し。人を恐れず我儘を爲ける は、三ヶ津の町人の德なり。大坂に或る大臣、世間をつらつら思ふに、此の四町の女郎高下合せて千三百餘人、毎日の髮油名名買にする事も不便なれば、一人一日を壹分に算りて、一年中に四十六貫八百目にて濟む事なれば、阿波座に家を一軒求めて、唐銅の油壺を据ゑて、永代髮の油寄進すべし、是れは後世にも成つて、又の世に傾城の好く男にも生るべし、諸山の靈地に常燈は、大名のともし手は珍しからず、抑も此の思ひ立ち、祖母よりの讓り銀五百貫目有れば、是れを確かなる大臣に月一割にして預け、其利銀にて成る事と云ふ。其座に愁の孫吉と云ふ末社、同じ事ならば、女郎の身揚程悲しさうなる物は無し、是れに御合力あらば深き善根に成るべしと勸めける。此談合未だ極まらぬ中に、好き事聞き捨てにして京へ上れば、島原の踊に袋忠、彌七、兩人丸裸に成つて惣身を金箔に塗みて、其のまま黃金の踊佛、浮世を夢のやうに思ふ、あの心が極樂と、此身も色道の宿も定めず、一遍上人に藤澤を越えて江戸に下りしに、吉原は淋しく見えて內證の繁昌、とかく金澤山な所故なり。さるに由つて女郎の志自ら强く成りぬと、宮島と云ふ書物に見えしに違はず、遊女は好き男次第にて、其時其時の色を增す物なり、紅葉は千人の目にも太夫と見えしは、中比の高尾にぞ有りける。風儀云ふまでも無し。宿に歸りても、衣裝著替ゆ〔ふ〕ること無く常なり。如何にしても上方の太夫の成らぬ事なり。揚屋の畫を勸めて身仕舞に歸るに、道中綽かに、右左に對の禿步みながら眠れる程、靜かに位を取つて憎い所無く、宿近く成れば六尺先へ走り、門口より高尾樣お歸りと云へば、行水の役人は絹漉の湯を運ぶ、料理人手ばしかく、煮方の者は火吹竹を取り廻し、定紋の蓋掛けたる瞎立、不斷醫者持脈を取り、此太夫御祈念の日待坊も毎日お見舞申し、御勤め二十年もと心中に祈りける。たとへ女郎と成りても、是れは一生の譽れなれば、此人の耳の垢を此道の女守袋に入れ置くべし。殊に高尾は流

女、古今の能書、文にして人を殺し、諸人思ひを懸けぬれば、如何なる大名高家にも行きて、玉殿にも住むべきものなれ。なれども緣程をかしきは無し。油三と云へる男に請け出されて、今は靈岸島に侘住居ながら、是れより思ひ出何か有るべし。何れ女郎狂ひの始末、必ず無用なり。其銀とて殘る物には有らず、何ぞ世に留まる事を、色町に殘したき物ぞかし。淺草の久慶が笑はせけるは、向ひ町の大臣、十九年以來に壹萬二千兩ある金を、後家の米の銀を拂ふ樣に、人知れず一度一度に揚屋へ渡しけるが、誰に逢ふとも又は女郎買とも見えずして、世上へ隱すを大事大事と思ふ內に遣ひ果たし、今は堺町にて見世物の閻魔島の木戸番、萬九と云ふ大臣是れぢや、是れぢや。

三　四十七番目の分限、又一番の貧者

現銀三千七百貫目持つて大きな臭を爲やるな、都の身躰袖鑑を見るに、やうやう四十七番目に書けり。然れば京の分限は遠國の手前善しとは各別ぞかし。家に傳へし諸道具ばかりも大分なり。此の金銀を讓られては、一牛藥花に五十人口など、坐食にしても餘るべき事なるに、惡所使ひは限りの無き物にて、兄弟三人して撒き捨てける程に、親仁相果てられて未だ十五六年の中に家藏までも賣り拂ひ、三人一所に借家住居して悲しき身とは成りぬ。世は知れぬ物ぞ、昔は三條通りに大名貸をして、今は米屋に當座借して、一日暮らしに唯だ居ては埒が明かねば、綿秋を見懸けて美濃路より尾張の里里を廻り、京へは知れぬ身過ぎ、兄弟三人外は交ぜず、辻拍太鼓、始まり始まりと聲立てて、見物集まれば、先づ御斷りを申します、只今仕りますは、都島原時花太夫全盛の形態、買手の大臣取り上げられまして、散散の仕合せと成り、舌食ひ切りて死なれは致しませず、面の皮を晒しまして、勸進仕りまする風俗までを、細かに心を附けて致しまする。今程は上方に坂田藤十郎と申しまして、艷し鬱の名人あれども、其れは寫らぬ處も御座ります。我等の致しますは其儘生の樣〔に脫カ〕して御目に懸けますと、身の上の事を狂言に、兄は大臣に成れば、弟は太夫の黨に成り、中男子は末社の花崎左吉に成り、世に有る時の座配、口舌の詰所き、女郎の僞の撿めやう、無心云ひさうな色を見て手を好く外し樣、今の樣に賢ければ何か歎く事無し。親の異見を聽かず、內を逐ひ出さるる身振、見る人も爰が善う似たと大笑ひ致しける。其後は勸當せられ、悲しき世渡の思ひ入れ、見物に泪こぼさせ、さて綿笠を脫ぎて、此里のお衆は各別、通りお衆樣方持ち合せが御座らば、少しの露を打たしやりましよ。祖父の年忌に中りまして、汗水を流しますでも御座りませぬ。壹人に千貫目づつ入りましたる鬱で御座ると、人は知らぬ事を云ひける。此の見物の中に、京万太夫が芝居より江戸へ役者見立に遣はしけるに、少し爲こなして上方でも當りさうなる者は、手付貳百兩など云ひけるが、是れも好いには極まり難し。先づ上りての一談合と、道中を急ぎしが、自分の用にて美濃路に廻り、其の辻鬱に我を折つて、さても爲たり爲たり、濡れをあれ程に帥〔粹〕の好く樣にする者、廣き江戸にも無し。此の三人は六百が立役は古金買に見せても有り。今まで見知らぬ素人鬱に斯かる上手も有る物かな、是れを抱へて此度の臭見せ、都に花を

降らせんと、一筋に思ひ入り、子細を聞けば、四條の川原に我我身晒す事一門の恥と云ひ、思ひ寄らずと同心せぬを、堪當つて小判ずくめにして、やうやう京に連れ上り、先づ男振は好し、太夫元も外へは沙汰無しに珍重かること淺からず。さて潛かに狂言に懸けて見しに、三人ながら傾城買の事より外は、物申と云ふ事も成らず、さりとては可笑し。銀使うて遊女の道ばかり飲み込みけるやと大笑ひして、急ぎ暇を出せば、損の行かぬ浪人して、後は三人肩揃へて伏見の色町へ京よりの卸とは成りぬ。一切の身過ぎ、其道道に身を助かるなれば、親より讓りの家業を勵み、主の蔭なる賣買を油斷無く、其家確かに繁昌させて、世間を男子に渡し、浮世隙に成つて、六十過ぎて年月の氣晴らしに女郎狂ひはする物なりと、さる法師の語り置かれし。必ず色道に仕過し多し、無分別盛んの時行くべき所にあらず、是れより恐い所無し。

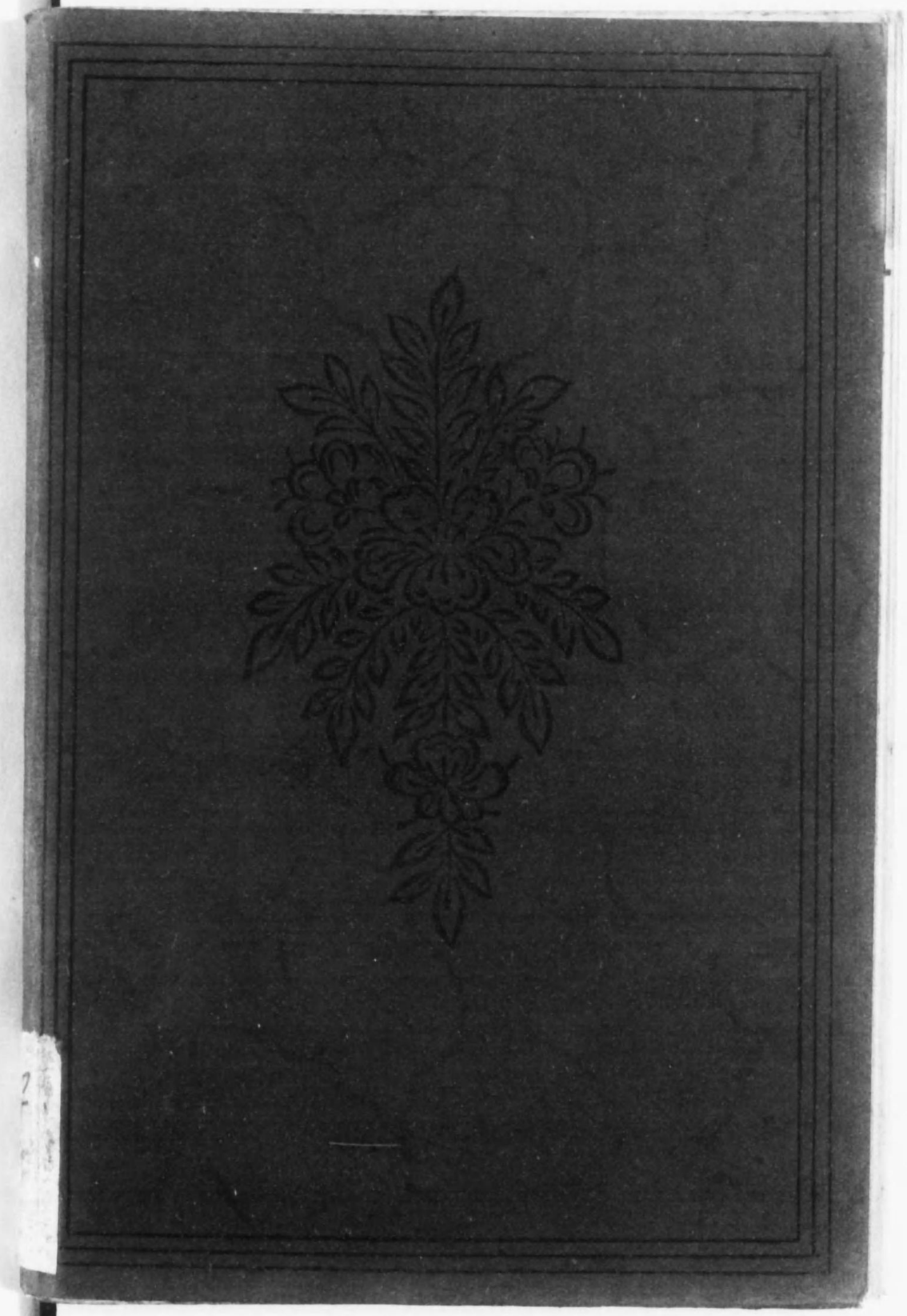
元祿八乙亥曆三朔春吉日

京洛寺町五條上ル町　田中庄兵衛
浪花堺筋備後町　八尾甚左衛門

大正十五年十月廿三日印刷
大正十五年十月廿五日發行
昭和二年一月拾六日再刊　〔非賣品〕

日本古典　第一回
西鶴全集
第五

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎
東京府北豐島郡長崎町一六二
發行者　長島豐太郎
東京府北豐島郡長崎町一六二
印刷所　新樹製版印刷所
印刷者　高瀨清吉

發行所　東京府北豐島郡長崎町一六二
日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三二
電話巣鴨小石川七〇九九

終